

修士論文（要旨）

2010年1月

英語学習における動機づけと性格との相関関係  
—日本の中学生の場合を中心として—

指導 森住 衛 教授

国際学研究科

言語教育専攻

207J4005

大塚 茉莉恵

# 目次

## I. 序論

1. テーマ設定の理由 . . . . . 1
2. 研究目的 . . . . . 2
3. 研究方法 . . . . . 3

## II. 本論

### 第1章 動機づけと性格に関する先行研究

- 第1節 3つの視点から見た動機づけ . . . . . 4
- 第2節 中学生の英語学習の動機づけ . . . . . 10
- 第3節 3つの視点から見た性格 . . . . . 11
- 第4節 中学生の性格の特徴 . . . . . 14

### 第2章 動機づけと性格に関する質問紙の内容と調査方法

- 第1節 質問紙の内容 . . . . . 16
- 第2節 質問紙の調査方法 . . . . . 22

### 第3章 調査結果と分析・考察

- 第1節 中学生の動機づけの傾向と特徴 . . . . . 24
- 第2節 中学生の性格の傾向と特徴 . . . . . 27
- 第3節 中学生の動機づけと性格の相関関係 . . . . . 30

## III. 結論

1. まとめ . . . . . 35
2. 研究の応用性 . . . . . 38
3. 今後の課題 . . . . . 38

生徒の勉強への意欲と性格には関係があるのだろうか。本研究は、中学生が学校で英語を習う際の動機づけと性格の相関関係についての研究である。動機づけとは、何か物事を行う際の意欲のことである。動機づけの問題は重要であり、学習者自身の問題だけでなく、教師の役割でもある。本研究では、どのような種類の動機づけが個人に合っているのかを明らかにし、教師が生徒を動機づける際の手助けになることを願っている。

性格とは、個人の特徴を示す。より個人差を意識した指導を考え、各個人で必ず備わっている「性格」に着目した。本研究は、この動機づけと性格の互いがどのように関係しているのかを追究し、どのような性格の生徒がどのように動機づけられやすいのかを明らかにすることを目的とする。

テーマ設定の理由としては、①日本の中学生の勉強への意欲が低下している。②生徒個人の多様性に着目する。③英語学習の動機づけと性格との相関関係を扱った研究はあるが少ない。の3つの点が挙げられる。

研究目的としては、①動機づけと性格についての先行研究を整理する。②動機づけと性格の相関関係を調べるための質問紙を作成し、質問紙調査を行う。③動機づけと性格にどのような相関関係があるのかを分析・考察する。の3点が挙げられる。

この研究目的を達成するため、論文の構成は、序論、本論、結論の3部構成をとり、本論は、3章立てにしている。また、質問紙調査とその結果の分析・考察を行い、動機づけと性格の相関関係を知り得た。

その結果、結論では、次のようにまとめられた。

動機づけと性格についての先行研究の整理では、まず、動機づけに関して触れた。動機づけの定義は、「目標へ向かわせ、行動を開始し、それを維持させる。内発的動機づけ、外発的動機づけ、統合的動機づけ、道具的動機づけ、無動機、などがある。」とした。

次に、中学生の英語学習の動機づけでは、小学生や高校生の動機づけと比較し、中学生の動機づけは、学年によって動機づけが変化する傾向にあり、内発的動機づけから外発的動機づけ、統合的動機づけ、道具的動機づけへと変化するものや、逆に外発的動機づけから内発的動機づけへと変化する場合もあった。小学生の動機づけでは、学年があがるに従い低下している。また、動機づけの因子の中に内発的動機づけの要素がある因子が見出されている。高校生の動機づけでは、外発的動機づけが高く、統合的動機づけが低い。また、学年が進むにつれ、外発的動機づけが低下する傾向があることがわかった。

また、性格に関して、その定義は、「個人の特徴を言い、その人の行動や考え方を示す。遺伝的な素質と新たに形成されていくものがある。勤勉性、情緒性、知的的好奇心、調和性、外向性などの種類がある。」とした。

さらに、中学生の性格の特徴では、発達の特徴と性格形成に関して触れた。青年期の発達の特徴としては、自己の内面や外面への関心が強くなることや自己の意思で物事を決定したり、評価する傾向が強くなる(詫摩, 他 1998: シュプラングァー 1977)。また、性格形成では、自己の関心が高まり、自己中心性、孤独、劣等感、などの特徴が現れる(水口・竹内 1992)。以上の事から、中学生の性格の特徴としては、情緒不安定な面が現れるのではないかと考えられた。

質問紙の内容と調査方法では、動機づけと性格のそれぞれの質問紙を作成、実施した。動機づけの質問紙では、小泉・甲斐(1992)、山森(2003)、斉藤(2005)、廣森(2005)の質問紙を参考にし、

性格の質問紙は、曾我(1999,2000)、和田(1999)を参考にして作成した。調査対象者は、千葉県内の3つの公立中学校における、生徒260名である。有効回答者数は、227名であった。調査時期は、2009年7月中旬～下旬である。

調査結果と分析・考察では、まず、中学生の動機づけの傾向と特徴では、道具的動機づけが高く、外発的動機づけが低い傾向にあった。中学生の性格の傾向と特徴については、全体的に調和性が高く、外向性が低い傾向にあった。中学生の動機づけと性格との相関関係では、SPSSのピアソンの積率相関係数を用い、分析を行った。その結果、動機づけから見た性格との関係では、以下のような結果となった。

- ・内発的動機づけは、勤勉性と外向性に中程度の相関があり、その他の性格にも弱い相関が見られた。
- ・外発的動機づけは、ほとんどの性格に相関は見られなかったが、情緒性、知的好奇心、外向性に弱い相関が見られた。
- ・道具的動機づけは、勤勉性と中程度の相関があり、その他の性格にも弱い相関が見られた。
- ・統合的動機づけは、勤勉性、知的好奇心、調和性、外向性に弱い相関が見られた。

また、性格から見た動機づけとの関係では、以下のような結果となった。

- ・勤勉性は、内発的動機づけと道具的動機づけに中程度の相関があり、統合的動機づけと弱い相関が見られた。
- ・情緒性は、内発的動機づけ、外発的動機づけ、道具的動機づけと弱い相関が見られた。
- ・知的好奇心は、全ての動機づけと弱い相関が見られた。
- ・調和性は、内発的動機づけ、道具的動機づけ、統合的動機づけと弱い相関が見られた。
- ・外向性は、内発的動機づけと中程度の相関があり、またその他の動機づけとも弱い相関が見られた。

しかし、今回の調査では、「強い相関あり」を表す値が得られなかった。このことは逆に言うと、どのような生徒にも動機づけができるということである。どのような生徒にも様々な動機づけが合う可能性があるのだと考えられる。

## 参考文献

- 小泉令三・甲斐照成(1992)「中学3年間の英語学習における学習態度・動機および能力自己評定の変化」『福岡大学紀要』41(4) 297 - 307
- 斎藤嘉則(2005)「中学生の英語学習に対する学習動機の特徴—「学習動機を測定する質問項目」による調査分析—」東北英語教育学会研究紀要第25号 83 - 90
- 曾我祥子(1999)「小学生用5因子性格検査(FFPC)の標準化」心理学研究,70,346 - 351
- (2000)「青年用5因子性格検査(FFPA)の作成と妥当性,信頼性の検討」日本性格心理学会大会発表論文集 102 - 103 日本パーソナリティ心理学会
- 詫摩武俊・青木孝悦・杉山憲司・二宮克美 他(1998)『性格心理学ハンドブック』東京:福村出版
- 廣森友人(2005)「外国語学習者の動機づけを高める3つの要因:全体傾向と個人差の観点から」『*JACET Bulletin*』No.41 The Japan Association of College English Teachers.
- 水口禮治・竹内照宗(1992)『青年期までの発達心理学』東京:ブレーン社
- 山森光陽(2003)「個人差を維持した学習意研究のための一提案—より教育的示唆の得られる教育研究のために—」『早稲田大学大学院教育学研究科紀要』別冊10号-2 123 - 131
- 和田さゆり(1996)「性格特性用語を用いたBig Five尺度の作成」心理学研究,67,61 - 67
- エドアルド・シュプランガー(1977)(原田茂 訳)『青年の心理4版』東京:協同出版